肘歴通信 第十六號（ごう）

「大蔵鉱山　鉱夫の生活」のこと

既報 14 号にて、明治～大正時代の大蔵鉱山史について書きました。今回は鉱山での生活に迫ります。

まず、現在の苦水川沿いの道は明治末に開かれました。それまでは朝日台を大回りする道筋で、苦労したそうです

右手前が商人街、左奥が鉱山市街

金山橋を渡り進めば、左方は苦水川にして、右方は大平野といふ少しく高き原野あり、この麓に四,五戸の商店軒を並ぶ、これ肘折の支村にして、「和合」といふ。渓流に架したる小橋を渡り行くこと約一町、左方に折るれば八,九戸の商店を並べて立てり、この中には理髪店(大江理髪処)・呉服店(北澤商店)あり、其の外魚屋(役屋商店)・菓子屋・荒物屋など、ここを商人街と称す。
ここを通過し右方に折るれば、鉱山市街に出る。

鉱山市街には、鉱業主や役員の住居、商店、病院、駐在所、各課の事務所、黄金湯浴場、その他娯楽施設。

カルデラ館の位置には、製材工場・真吹場、旧製錬場。

鍵金野に上ると選鉱場・新製錬場・古口―大蔵鉱山の運搬鉄索停車場などがありました。

右方には各役員の住宅軒を並べて建てり、西方遥かに黒塗の煙突高く中空にそびえ、それより出づる白煙朦朧として天を覆い、亜硫酸特有の臭気鼻を衝く。これ鉱石を溶解製錬する鉱炉の在る処なり。右隣に器械の工場あり、道を挟んで真向に製材工場あり。

2 枚目に続く→

鉱山市街

１枚目の続き→

鉱山に勤める者は、まず鉱夫への募集に応じます。役場直轄が一番の好待遇となりますが、審査が非常に厳しいため、殆どが飯場長という鉱夫親分の子分となります。
↳役場外の鉱夫募集・作業監督を代行する。10 名ほどいる

飯場長は、自分の飯場(長屋式住居)に鉱夫を迎え入れ、鉱業主から紹介手数料を取ります。

飯場は全部で 50 棟あり、
１棟に 10 戸を収容。

飯場

終業後は肘折の酒場や料亭に繰り出して、遊興したそうです。

賃金は飯場長が纏めて受け取り、監督歩合を天引きして各々の鉱夫に渡していました。

また、飯場には救済會(通称：取り立て)という仕組がありました。これは飯場長を親分とし、新入りを鉱夫達の兄弟分として“取り立てる”もので、藤屋旅館二階の大広間にて、斉藤佐次兵衛の仕切りで「親子兄弟の盃」を交わします。
鉱夫兄弟が病気や事故で働けなくなったり、または死亡した際には、見舞金や弔慰金を渡し、しばらくは親分が生活の面倒をみる。という、所謂「任侠」のそれです。
次号では、鉱夫の作業内容を詳しくまとめます。

肘折歴史研究会